石庭

指東庵のすぐ東側の岸に組み込まれた石庭もまた夢窓国師の手による傑作であり、禅宗が広まった室町時代（1336～1573年）につくられた、丁寧に刈り込まれた木々や箒で掃いた敷石を持つ、より様式的な石庭の原型となったものである。

夢窓国師は、自らの墓の景観表現としてこの石庭をつくったと考えられているが、段々になったその優雅な構造が、水の枯れた滝を模していることは一目瞭然である。自ら跳ね上がった鯉を模した鯉魚石といわれる岩もある。滝のいちばん上まで登っていった鯉は龍（龍神）になると言われており、不可能と思われることに挑戦することのメタファーとして解釈されている。